

10 月第 4 週の礼拝説教

■日 時：2025 年 10 月 26 日（日）10：30～11：30 降誕前第 9 主日礼拝

■説 教：保科けい子牧師

■聖 書：新約：マルコによる福音書 10 章 1～12 節（新約 P80～81）

■説教題：「神が結び合わせてくださったものを」

■讃美歌：6（つくりぬしを 賛美します）

377（神はわが砦 わが強き盾、）

今、私は基本的には日本基督教団の聖書日課に従って聖書の箇所を取り上げ、その中から福音書を選んでおります。ところが、今日の箇所になりまして、この箇所はあまり選ばたくないという率直に思いました。しかし、聖書日課を取り上げるので良いことは、自分の好き嫌いとか得意不得意によって聖書の箇所を取捨選択しない、という点にあります。どの聖書箇所からでも御言葉を聞き福音を聴くということをしなければならない、という説教の原点に立ち返らせられるという良さがあるので、本日の箇所を取り上げました。

最初に、今週の金曜日の 10 月 31 日は、宗教改革記念日になることを確認したいと思います。本来ならば、今日はその関連する聖書の箇所を取り上げてお話ししたというところですが。けれども、そうではないところを取り上げています。私は立川教会に参りました 2022 年と翌年の 2023 年に 10 月 31 日に近い主日礼拝に、ローマの信徒への手紙 1 章 16 節から 17 節を取り上げ、宗教改革について説教をしています。しかし、昨年 2024 年 10 月 27 日の主日礼拝では、最初に宗教改革についてお話をし、その後は日本キリスト教団のその日の聖書の日課を取り上げています。本日もそのようにしたいと思います。

ところで、私は地方の公立高校の出身ですから、最初にキリスト教に関心を持ったのが世界史の授業からでした。特に、その時使用していた山川出版社の「世界史B」の教科書の内容が好きで、つい最近まで新しい版が出るたびに購入して読んでいました。今、手元にあるのは2022年3月発行のものです。そこで記されている宗教改革の始まりには、「お金が箱の中に投げ入れられる音とともに、魂は救われる」と宣伝しながら、贖宥状（いわゆる免罪符と呼ばれるもの）を売り歩いていた当時のカトリック教会の説教者たちの姿が挿絵として描かれています。1500年代当時のローマ教皇レオ10世は、ローマのサン・ピエトロ大聖堂の新築のために、莫大な資金の調達に迫られていました。そのために贖宥状を売り出していたのです。そのようなカトリック教会の姿勢に憤り、カトリックの修道士であったマルティン・ルターは、「魂の救いは善行にはよらず、キリストの福音を信じることのみによる」という確信から、「九十五か条の論題」を提示したのです。私は長い間、実際に世界史の舞台になったいろいろなところを見てみたいという思いがありまして、2010年にヴィッテンベルクの城教会を訪ねることができました。ベルリン中央駅からルターシュタット・ヴィッテンベルクという駅まで、ICEという日本でいえば新幹線にあたる列車に乗って出かけました。塔がそびえ立つ石造りの城教会の扉に、火事で焼けてしまったと言われている「九十五か条の論題」の復刻版が、確かに元通りの場所に掲げられているのを確認しました。ラテン語で記されていますから、ルターが議論を挑んだのはラテン語が読み書きできる当時の教会の聖職者たちであったことが伝わってきます。決して、一般民衆ではありませんでした。けれども、ルターはその後、多くの一般民衆に自分の国の言葉で聖書を読んでほしい、という思いから聖書をドイツ語に翻訳しました。そして、ゲーテンベルクの改良した印刷技術の発展と共に、ルターの訳したドイツ語訳聖書が印刷されるようになり、宗教改革の波が世界中に急速に伝わっていきました。そして今、私たちはそれ以

後の500年以上の歴史の流れの中で、自分の国の言葉で自由に聖書を読むことができ、自由に主イエス・キリストへの信仰を告白することができる時を与えられています。

私たちの立川教会も、宗教改革の流れが世界中に広がっていく中で生み出されました。そのルーツは、ルターの宗教改革から少し遅れて、フランス人のジャン・カルバンがスイスのジュネーブで独自の宗教改革を行ったことから始まります。その流れは、フランス、イギリスなどにも広まっていき、アメリカに渡り、やがて日本へと伝わってきました。私たちと共に礼拝をささげている橋本ライヤさんの母国であるフィンランドなどの北欧諸国には、ルター派が伝道を進めました。そして今もなお、宗教改革によって新たにされたキリスト教は全世界で生き続けているのです。そのことを覚えておきたいと思います。

さて、本日の聖書箇所マルコによる福音書の10章から1節から12節までを見ていきます。1節に「イエスはそこを立ち去って、ユダヤ地方とヨルダン川の向こう側に行かれた」と記されています。主イエスが立ち去った「そこ」とは、9章33節に「一行はカファルナウムにきた」と記されているところです。そのカファルナウムは、聖書の後ろの方にある「新約時代のパレスチナ」という地図に描かれていますが、ガリラヤ湖の北の岸にある町です。主イエスのガリラヤにおける伝道の拠点となっていました。主イエスは、その町を去りユダヤ地方とヨルダン川の向こう側に行かれた、すなわち、ヨルダン川を渡られたということです。地図ではペレアと呼ばれている地域だと思えます。主イエスの旅の最終的な目的地はエルサレムです。そこで主イエスは捕らえられ、十字架につけられるわけです。すでに主イエスご自身が二度にわたってそのことを予告されています。8章31節には、「それからイエスは、人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、三日の後に復活することになっている、と弟子たちに教え始められた」と記されています。このことへ向けての新たな歩みが始められたことを、10章1節は記しているわけです。

当時、ペレアはローマ帝国の支配下にあり、ヘロデ・アンテパスという王が支配していました。本日の箇所に語られていることは、実はヘロデの支配下で起こったことに深い意味があります。本日の箇所の主題は、2節に「夫が妻を離縁することは律法に敵っているでしょうか」という問いがあるように、離婚、離縁のことなのです。けれども、この問題はヘロデの支配下では触れてはならないタブーとされていました。なぜなら、マルコによる福音書の6章14節以下に語られているのですが、ヘロデは自分の兄弟フィリポの妻であったヘロディアをフィリポと別れさせて結婚していたからです。そのことを、厳しく非難したのは洗礼者ヨハネでした。そのために彼は捕らえられ、ヘロディアの望みによって首を切られてしまいました。そのペレアで、ファリサイ派の人々が主イエスのもとに来て、「イエスを試そうとした」のです。ヘロデの支配下で敢えてこのことを問うことによって、彼らは主イエスを危機に陥れようとしているのです。主イエスが、妻を離縁することはいけないと答えるなら、ヨハネと同じ運命をたどることが考えられます。つまり、捕らえられ首を切られてしまうということです。逆に、場合によっては離縁しても良いのだと教えるなら、イエスという男はヨハネとは違って、自分の身を守るためにヘロデを非難することを避けた、しかも律法に違反してまで自分を大事にした、というふうに批判されてしまうかもしれません。彼らは、どちらにしても主イエスが困るような問いをここで投げかけてきたわけです。

そのような悪意ある問いに対して、主イエスは3節にあるように、「モーセはあなたたちに何と命じたか」と逆に問い返されました。それは、神の掟である律法にはどのように定められているか、ということです。その問いは非常に深いものでした。ファリサイ派というのは、非常によく聖書を学んでいた人々ですから、律法にも通じていました。どのような小さな掟であっても守っていかうと考えて生きていた人たちでした。主イエスの問いに対して、彼らは4節で、「モーセは離縁状を書いて離縁することを許しました」と答えました。女性が離縁状を持っていれば、他の男性と結婚しても姦淫の罪にはならないのです。ですから、これはある意味で、離縁された女性の立場を守るためのものでもありました。彼らは、聖書の中で離婚について語っているこの箇所を言葉をよく知っており、その解釈をめぐって盛んに議論していたのです。主イエスは、このような議論をしているあなたがたは、聖書のどこに何が書いてあるかをよく知っているかもしれないが、聖書が読めてはいない、そこから律法の本当の意味を理解していない、本当に学ぶべきことを全く学べていない、ということを描き出そうとしておられるのです。彼らは、離縁についてのこの教えを、離縁することは律法にかなっているか、どういう場合なら離縁することはできるか、という表面的な事柄としてのみ捉えており、結婚や夫婦についての神様の御心を見つめることができているということではありません。離婚のことを考えるためには、まず結婚のことを、そこにおける神様の御心を、聖書に基づいてきちんと考えなければなりません。けれども、そのことを抜きにして、ただイエスという男を何とかして陥れてやろうという思いのためだけに、問いを投げかけているわけです。

主イエスは7節,8節で、次のようにお答えになっています。「それゆえ、人は父母を離れてその妻と結ばれ、二人は一体となる」、これは創世記2章24節の言葉です。今でもキリスト教の結婚式の時に読まれる、結婚と夫婦についての聖書の教えの根本が語られている聖書箇所の一つです。そして、その教えの前提となっているのが6節の「天地創造の初めから、神は人を男と女にお造りになった。」という御言葉です。人間が男と女という性別を持ったものとして作られていることに、神様のどのような御心があるのかを語っています。そして、9節には「従って、神が結び合わせてくださったものを、人は離してはならない」とあります。共に生きる相手、パートナーは私たちが自分で探し出し獲得するものではありません。神様がそのような相手を与えてくださり、二人を結び合わせてくださるのです。夫婦というのは、そのように神の結び合わせてくださったものです。ですから、結婚式において、この9節の言葉が結婚の宣言において読まれます。神様と列席の人々の前で結婚の誓いをした二人がこの時から夫婦であることを牧師が宣言する、そこにおいて、「神が合わせてくださったものを人は離してはならない」と告げられるのです。しかし、現代では人が結婚するか否か、あるいは、どのように生きていくか、それは必ずしもこの聖書の御言葉に即したものとなっていないかもしれません。けれども、創世記1章27節で「神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された。」と記されている考えるときに、いろいろな生き方をもう少し自由に捉えても良いのではないかと、考えるキリスト教の人たちの立場もあります。本日の聖書箇所11節,12節も、離婚して再婚することを罪であるとして禁じているというよりは、今、神様によって与えられている、結婚や夫婦の関係を本当に大切に生きていくことを教えているのです。

そして、ここでの主イエスとファリサイ派の人々との問答を進み読んできた時に、非常に飛躍するのですが、私はエフェソの信徒への手紙5章の31節,32節において、このように語られている御言葉を思い出しました。「31それゆえ、人は父と母を離れてその妻と結ばれ、二人は一体となる。32この神秘は偉大です。わたしは、キリストと教会について述べているのです。」夫と妻との関係、それがキリストと教会との関係に類比されて語ら

れています。さらに言うならば、教会と私たち一人ひとりの関係へと類比させて考えることができるのではないか、ということです。そのように考えるならば、「神が結び合わせてくださったものを、人は離してはならない」との主イエスの宣言は、私たちの信仰を考える上での大きな慰めになります。主なる神様が、与えてくださった主なる神様と私との関係、主イエスと私との関係、教会と私との関係、それらをもう一度捉え直していきたい、そういう思いが湧き上がってきます。そして、それが2025年の宗教改革記念日に向けての私たちの歩みになるのではないのでしょうか。聖書がどのように語っているか、いろいろなところを比較して読んでいくと矛盾していたり、こちらで言っていることと正反対のことが語られている、これではm」整合性が欠けているのではないかと、思うことがあります。しかし、よくよく読んでみると、その中に神様が私たちに与えてくださっている本当の救いとは、一体どのようなことなのか、ということが見えてくるように思います。

宗教改革の三大原理は、今朝のジュニア礼拝でも話しましたけれども、「信仰のみ」「聖書のみ」「恩寵のみ」の三つです。これに万人祭司ということもつけ加えられることもあります。信仰のみ、聖書のみ、恩寵のみ、そのことを私たちが深く心に刻みながら、もう一度聖書の御言葉をよく読み、自分自身が本当にそこに立って生きていく、そのような思いを強められたいと思います。それが宗教改革の根本的な方針なのではないかというふうに思っております。

お祈りをします。

主なる神様、今日は今週の10月31日の宗教改革記念日をも覚えながら、与えられた聖書の御言葉について、いろいろ思いを馳せることができました。あなたが私たち一人ひとりに与えてくださった恵み、一人ひとりに与えてくださった生き方、それは様々です。しかし、そのような中にも、神様がいつも私たちを支え導いてくださる。主イエスが私たちを整えてくださる。聖霊が私たちをいつも励まし支えてくださる恵みが先だっているのです。そのことを深く覚えて歩んでいきたいと思います。今週一週間の歩みをどうぞ整えてくださるようお願いいたします。この祈りを主イエス・キリストの御名によっておささげします。